

詩の本 Ⅱ 詩の技法

監修 西脇順三郎・金子光晴



筑摩書房

詩の本

Ⅱ 詩の技法

監修・西脇順三郎・金子光晴

筑摩書房

詩の本 第2巻 詩の技法

1967年11月20日 初版第1刷発行
1980年1月20日 新装版第7刷発行

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8
郵便番号 101-91

電話 東京(291) 7651(営業)
(294) 6711(編集)

振替 東京 6-4123番

〔分類〕1390(製品)13302(出版社)4604

印刷／理想社印刷 製本／永興舎
Printed in Japan

詩の本

第2卷

詩の技法

目次

I 詩をつくる

詩をつくるこころ

詩の素材——現代詩の技法 1

詩のイメージ——現代詩の技法 2

詩のリズム——現代詩の技法 3

詩の構成——現代詩の技法 4

II わたしの作詩法

小さな三つの例

芸術としての詩

ぼくの苦しみは単純なものだ

見ている目

山本太郎 7

三好豊一郎 53

飯島耕一 87

安西均 115

入沢康夫 143

草野心平 169

北園克衛 177

田村隆一 191

黒田三郎 202

不毛と無能からの出発

被分解者・被抑圧者の方法

寓話

わたしの作詩法？

御報告

立場のある詩

未来の記憶

長谷川 龍生

黒田 喜夫

関根 弘

吉岡 実

岩田 宏

石垣 りん

長田 弘

216

227

240

257

266

283

300

I

詩をつくる

山本太郎
三好豐一郎
飯島耕一
安西均
入沢康夫

詩をつくるこころ―詩を書く友へ―

山本太郎



〈出会い〉ということ

白秋との生理的接触

詩は言葉もしくは言葉をつらねた形で「そこに在る」というようなものではない。詩集があるから詩が住んでいるはずだと思いこみ、訪ねてみるが、ついに逢えずじまい、というようなことは間あるものだ。

詩に出会いたいと思ったら君、活字を整理させる作業などいちばん後までとっておけ。

宮沢賢治が「風とゆききし 雲からエネルギーをとれ」と言ったのは、なにも単純な自然讃歌ではない。心をのびのびと展^{ひら}いて、詩を待つ生き方を教えているのだ。

言葉をこえた高みに詩を祭りあげるのは、しかし図式的すぎるし、第一不遜だ。僕達は詩と日常のなかで出会いたいと願う。詩は特殊な人間の知的玩具でもなければ、日常の壁のむこうで優美に操られる感情のお手玉でもない。

特別な感激も意味ももたずに毎日僕を通過してゆく言葉や風や光たち。

そのなにげなさに運ばれて、詩はある日やってくるのだ。

思ひ出は首すぢの赤い螢ほたるの

午後のおぼつかない触覚てざはりのやうに、

ふうはりと青みを帯びた

光とも見えぬ光？

あるひはほのかな穀物こくもつの花か、

落穂おちほひろひの小唄こうたか、

暖かい酒倉さくらの南で

ひき筆むしる鳩はとの毛のほめき？

音色おいろならば笛ふえの類、

蟾蜍の啼く

医師の薬のなつかしき晩、

薄らあかりに吹いてるハーモニカ。

句ならば天鷲絨、

骨牌の女王の眼

道化たピエローの面の

なにかしらさみしい感じ。

放埒の日のやうにつらからず、

熱病のあかるい痛みもないやうで、

それでゐて暮春のやうにやはらかい

思ひ出か、ただし、わが秋の中古伝説

(北原白秋「思ひ出」序詩)

白秋の詩集「思ひ出」が言葉の魔術的な妖しさを教えてくれたはじめである。十五、六歳の頃だったろうか。父の書架をあさり、ぼつぼつ青春の想いにめざめかけていた僕に、

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、

ではじまる薄田泣堇の詩や、七五調の見本ともいふべき藤村の詩はやはりなじめなかった。言葉が装いをこらしすぎているように思えたのだ。それにくらべ白秋の詩には、日常語を母胎とした表現が次々と現れ、つまり僕の思春期の生活感情と仄かな均衡をとる要素をもっていた。

泣堇や藤村の詩は朗読していると気持がいいが、メロディーに仮託されたその感情は僕の舌端で甘く消え、生理的な浸蝕力を示しはしなかった。それにしても、どこにでもころがっていきそうなくあたりまえの言葉が、白秋の手にかかるとなぜあも、美しい香りを放つのか。これが詩というものだ、と僕は思いこんでしまった。

しかしけっきょく、白秋の詩は、生理を酔わせはしたけれど、心まで奪いはしなかったのだ。

たまたま伯父にあたる白秋の、あの九州ナマリのふくみ声を、その詩の音調にあわせた僕は、必要以上の肉声をそこにきいてしまったのかもしれない。また蟾蜍とか天鷲絨、骨牌、中古伝説などの漢語がかもしだす、奇妙にフレッシュなイメージも驚嘆の的であった。ことに最終行の「ただし」という語句のもつ、音楽的效果に、それとはつきり気付かぬまま、強く魅かれていたのは、白秋と僕との詩質の相関性を暗示するものだったかもしれない。

ともあれその時生理的共鳴にそのままなだれこんでいたら、僕は十五、六歳にして、詩の真似事をはじめていただろう。白秋調を追従したか、漢語の面白さを追いかけて、パルナシアンまがいの文学青年をきどったか、それはわからぬが、「何を書くか」という最も重要な問題にぶつかる前に、「いかに書くか」に腐心する技術屋になりさがっていたことだけは間違いない。

《詩の技法》と題するこの一巻は、文字通り技法を中心に詩を解明する講座中のハイライトであるが、それだけに君には間違っても、そこから公式、定理のたぐいをひきだしてもらいたくないのだ。詩は個人的体験を原理とする。《詩の技法》の執筆に参加した詩人と、この本を手にとる人達との、まったく個人的な出会いのなかにしか詩は生れえないのだ。

僕を驚かした白秋の魔術的言語も、君にとっては退屈なくりにすぎぬかもしれない。

詩を書きはじめた動機として「忘れ得ぬ詩」とか「いまだに消えない一行」との出会い、ということがよく述べられる。「出会い」について、その本質をよくキャッチした飯島耕一の詩を読んだことがあるか。

おまえの探している場所に

僕はいないだろう。

僕の探している場所に

おまえはいないだろう。

この広い空間で

まちがいなく出会うためには、

一つしか途はない。

その途についてすでにおまえは考えはじめている。

「探す」

この詩の最後の一行を「それは　その途についてお前が考えはじめるということだ」と解説的に書き直せば、飯島の詩のポイントは君にも了解出来るだろう。

たがいにふれあう心の場合見え失った現代人の不安が、ここになんしろくらしい美しく象形されている。「一つしかない」というその途について、僕達は生涯考えつづけることだろう。

生きるということは、探すということでもある。出会いとは、未知のものに遭遇し、そのものと忘れがたく結びつけられる刹那せうなの、高度に緊張した心的状況をいう。

一篇の詩を読んで、いままで心のなかにもやもやたちこめていた感情が、いっきにはっきり照し出され、行き場を失っていた思考がすっきりと浮彫りにされる、という経験を君も持っているだろう。自分が感じ、考えていたことの全部が「そこに在る」と知った時の感激はたしかに忘れ難いものだ。

詩は明らかにその時君に訪れたといえる。問題はしかし、それから先にあるのだ。君を詩へ誘う契機となったその詩人の言葉に敬愛して溺れるか、それとも、その時目覚めた君の詩を君自身のかへ再び探しに出かけるか。

溺れることを僕はけっして悪いと言っているのではない。求心から喪心へと辿らざるをえない道筋は、恋愛にばかりあるのではない。溺れた末にたどりつく別離・訣別の底の深さは、最初から愛

の表明をさける周到さでは、とても達しえないものであろう。

溺れずに泳ぎ渡る覚悟があるなら、君は一人の詩人、「君の詩人」に心から投身するがいい。それも「詩をつくるころ」の準備になりうるだろう。個性とか独自性とかいう、創作中期にかかりやすい自己満足症だけは少なくともさけることが出来よう。

朔太郎への心理的陶醉

不幸にして（あるいは、幸いにしてというべきかもしれないが）僕を立どまらせる詩は僕の十代にはあらわれなかった。

というより僕の十代はスポーツに奉仕していて、感情生活は太陽をむずがってころげまわるチンコロと大差なかったのだ。だから、詩がすぐ傍らを通りすぎても気付こうはずがない。良く言えばテンシンランマン、もう少しはっきり規定すれば、粗暴粗野が僕の十代の代名詞であった。

萩原朔太郎に出会ったのはそして十代の終りだ。むろん「朔太郎の詩」にである。

蛙が殺された、

子供がまるくなつて手をあげた、

みんないつしよに、

かわゆらしい、

血だらけの手をあげた、

月が出た、

丘の上に人が立つてゐる。

帽子の下に顔がある。

〔蛙の死〕

る
幼年思慕詞とあとがきされた「月に吠える」のこの一篇はたとえば白秋の「思ひ出」にのって

いづこにか敵のゐて、

敵のゐてかくるごとし。

酒倉^{さかぐら}のかげをゆく日も、

街^{まち}の問屋^{とんや}に

銀紙^{ぎんし}買ひに行くときも、

うつし絵^えを手の甲^かに捺^{おさ}し、

手の甲^かに捺^{おさ}し、

夕日の水路^{すゐろ}見るときも、

ただひとりさまよふ街の